

レモン哀歌

高村 光太郎

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ
トペアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ぱつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが
かういふ命の瀬戸ぎはに

智恵子はもとの智恵子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた
それからひと時
昔山巔でしたやうな深呼吸を一つして
あなたの機関はそれなり止まつた
写真の前に挿した桜の花かげに
すずしく光るレモンを今日も置かう

〈出典 『智恵子抄』(新潮社、二〇〇三年)〉

【著者】高村 光太郎 (たかむら こうたろう)

一八八三(明治一六)年—一九五六年(昭和三二)年
詩人、彫刻家、評論家。東京都の生まれ。

【著書】『道程』『記録』『典型』など